

2014 日本放射化学会年会・ 第 58 回放射化学討論会 印象記

中島 覚
Nakashima Satoru

2014 日本放射化学会年会・第 58 回放射化学討論会が、2014 年 9 月 11～13 日の日程で、名古屋大学工学部で開催された。地下鉄名城線名古屋大学駅 3 番出口を出るとそこは会場の入り口となっていて、好立地であった。会場前の看板を広島大学の学生とともに撮影したので写真に示す。実行委員長は大同大学の酒井陽一先生であった。実行委員会によると 247 名の参加があり、うち 77 名が学生であった。

全ての講演を聞いたわけでもなく、全体を把握しているわけでもないことを初めにお断りする。印象は執筆者の立場で決まるところがあるので、筆者がどんな人間かを説明してから本稿を記す。筆者は、広島大学において自然科学研

究支援開発センターで仕事をしつつ、化学専攻で小さいながらも研究グループを主宰している。自然科学研究支援開発センターの専任教員として放射線管理に努め、かつ放射線防護に関する新たな研究分野を開拓したいと考えている。それと同時に、化学専攻併任教授として化学専攻の学生の教育と化学研究に当たっている。筆者自身は、この両者はどちらも大事だと考えているが、この両者を筆者の中でどのように調整するかいつも悩んでいる。そして両者を上手にこなさなければ生きる道はないとも考えている。

放射化学はもともと学際的な特徴を持っており、化学以外の他分野との境界領域の研究も進んでいる。しかしながら、学際的といえども化学という学問の中の一分野であることも常に自覚しておく必要がある。本学会の将来を考えるなら、化学専攻及び関連する専攻の大学院生がいかに関わり、伸びていくかを考えなければならない。このような大学院生が関連分野の研究者と切磋琢磨して互いに繁栄するのが望ましいと考える。前記の学生参加者の内訳は分からないが、プログラムを見ると大部分が化学専攻の学生であった。放射化学の研究室に配属された学生が充実した研究を行えること、そして化学という学問分野の中で放射化学の面白さを学部 3 年生までに伝え、卒研配属を希望する優秀な学生が増えることが重要である。このような人材育成の流れがあってこそ実りある学際研究も進展すると考える。



写真 会場前の看板と土手遥君（広島大学、左）、金子政志君（広島大学、右）

本学会の特徴は、学会の中に核化学分科会、原子核プローブ分科会、 α 放射体・環境放射能分科会、放射化分析分科会があり、更には若手の会もあってそれぞれ活発に活動してきたことである。残念ながらメスbauer分光法関係の研究発表数や原子核プローブ分科会への参加者数は多くはなかった。この分科会のメンバーはほかの学会でも発表する機会があるからだろうか。筆者自身も放射化学とは関係ない化学にも興味があって節操がないとも考えているが、長年メスbauer分光法を用いて化学研究を進めてきたので残念な思いがある。

筆者自身は、最近ではランタノイドやアクチノイドの化学等にも興味を持つようになった。その先の超重元素の化学も重要である。このような分野が活発なのは喜ばしい。周期表を眺めると化学の中で放射化学が貢献すべき分野は広く面白いものであると感じる。化学専攻併任教授としてこの分野の教育研究を担当する責任の重さを感じる。そして、学部生や大学院生に対して化学の中での放射化学の重要性を伝えていく必要があると考える。

特別講演も学際領域からと放射化学の本流からのものであった。加藤克彦先生（名古屋大学大学院医学系研究科・医学部医学科）による「核医学検査及び治療の最前線」と久保謙哉先生（国際基督教大学）による「大強度陽子加速器施設 J-PARC における放射化学研究」であった。前者は医療との学際領域を研究するには重要であり、後者は放射化学の様々な領域の方が興味を持つところである。久保先生の講演後の一般発表が MUSE と ANNRI を紹介されていて、最初は何のことかと思った。MUSE は MUon Science Establishment の略であり、ANNRI は

Accurate Neutron-Neucleus Reaction measurement Instrument の略とのことである。特別講演の後、それに関連する発表を集めたのは面白い試みである。

「福島原発事故関連」の研究発表は今回も引き続き多かった。福島に貢献することは本学会にとって重要である。他分野との関係では、樹木根学会との合同ランチョンセミナーが開催された。学際的な学会らしい取組であったと考える。2日目の昼には見学会も開催された。名古屋大学年代測定総合研究センターを見学し、名古屋大学の学術研究の奥深さを知るよい機会となった。

前記の面白い取組に感心したが、少し気になった点もあった。何年前には公募セッションがあり、会員がシンポジウムを提案していた。大変活発なシンポジウムであったと記憶している。また、主となる座長に加えて若手研究者や学生を副座長に選任して司会進行していた。これらの試みは学会が活発な方向に向かうようにする試みだったと思う。このような試みを長続きさせることは重要であろう。討論会は各実行委員会の創意工夫で行うべきだとは考えるが、これまでの良い点は継承していくのが良いと考える。

学会の最後には、若手の優秀賞が選出され、口頭発表の中からは森本佳祐君（大阪大学）、佐藤志彦君（筑波大学）、金子政志君（広島大学）が、ポスター発表の中からは奥村慎太郎君（京都大学）、重河優大君（大阪大学）が受賞した。若手優秀賞が放射化学の様々な領域から、しかも比較的多くのグループから選ばれたことは放射化学の未来にとって喜ばしい。

（広島大学自然科学研究支援開発センター）